

Phraseology 管見

八木 克正

(関西学院大学)

2006年8月19日に、John Sinclairが京都の立命館大学で講演した。John Sinclairは、言わずと知れた、イギリスのCOBUILD Projectの中心人物で、膨大な語彙数をほこるコーパス Bank of English 構築と検索ソフトの開発を手がけ、*Collins COBUILD English Advanced English Dictionary* や、*Collins COBUILD English Grammar*, *Collins COBUILD Dictionary of Phrasal Verbs*, *Collins COBUILD Grammar Patterns 1: Verbs*, *Collins COBUILD Grammar Patterns 2: Nouns and Adjectives* など、およそCOBUILDと名のつくほとんど(あるいはすべてかも知れない)の辞書、著書には名前が出てくる、コーパス言語学の草分けである。

講演の趣旨は、コーパスに対する基本的な考え方の転換に伴った新たな検索ツールの紹介であった。コーパス検索は、基本的には、単一の語を中心に(この中心になる語を node と呼ぶ)前後にどのような語が生じるかを問う場合と、最近では、n-gram という検索ツールで、任意の数(おのずと数に限界はあるが)の語の連続を呼び出す、という場合が中心であった。

しかし、言語は、語ではなく、語の固まりが意味をなす単位であると考え。従って、検索ツールも、語の連続を効果的に検索できるものでなければならない。たとえば、hard work という連続は、この順序だけではなく、work hard の語順や、work very hard のように間に別な語が入ったりして、極めて柔軟である。このような様子が検索できることが必要である。このような考え方から、congrams という新たなコンセプトの検索ツールを開発したという。

彼の基本的な言語観は、言語の研究は、phraseology から始まる。ここから、lexis と grammar へと展開してゆく。このアプローチを holistic approach と呼ぶ。それでは、phraseology とは何かということになるが、それは、成句論あるいは、成句研究と訳せるものである。言語の中心をなすのは成句であり、その成句研究が言語学の中心となるというわけである。

これに対する反論、異論はいろいろとあろうが、言語学が phraseology から始まるかどうかは別にして、成句が言語の中で重要な位置を占めること、しかし、その研究そのものが、決して盛んに行われてきたわけではないことは確かな事実である。英会話の力をつけるためには、成句を覚えなければ始まらない。単なる日常会話ではない、込み入った内容を語ろうとすれば、語彙もさることながら、成句をどれほど知っているかということが極めて重要である。このような日常的な経験で十分わかっていることを言語学の研究の中心に置こうと考える学者がいてもおかしくはない。

日本では phraseology という用語も、実際の研究も、余り知られていないと思われる。実際のところ、では phraseology と銘打って、何を研究するのか、という入り口でつまずい

てしまう。

私は、過去 5,6 年は、phraseology を念頭においた研究を進めてきた。私の phraseology 研究は何も難しいことではない。辞書学の立場から、どの辞書にも書いてない、あるいは成句としてあがっていても、意味も用法も十分な記述になっていないものを捜すことから始める。成句は、母語話者がそれとは気付かないことが多い。日本語で「お目にかかる」というのは極めて当たり前の標準語だが、日本語を母語としない人がこの表現を分析的に考えると、「目にぶらさがる」とはどういうことか、などと考える場合がある。成句とはそのようなものである。

ひとつ例をあげよう。私には、比較的新しい成句ではないかと思うものに、*come as a cost* というのがある。事例をみてみよう。

The food-court mentality--Johnny eats a burrito, Dad has a burger, and Mom picks pasta--comes at a cost. Little humans often resist new tastes; they need some nudging away from the salt and fat and toward the fruits and fiber. A study in the Archives of Family Medicine found that more family meals tend to mean less soda and fried food and far more fruits and vegetables. [*Time*, Jun 4, 2006. "The Magic of the Family Meal" by Nancy Gibbs]

この *Time* 誌の記事は、家庭で家族が一緒に同じものを食べる食生活の重要性を述べたもので、この食生活から、健康で、健全な子供が育つという。冒頭の部分は、日本で言えば、スーパーマーケットの地下にあるような「フード・コート」での食事のように、それぞれが勝手気ままに好きなものを食べるような食生活は、*comes at a cost* である。「何かの代償を払うはめになる」といった意味である。

これが本当に成句として繰り返し使われているかを知るためには、コーパスを使った検索や実際の新聞や雑誌を見る必要があるが、間違いなく、かなり広く使われている。特に、新聞や雑誌の見出しで使われる。しかし、この成句は上記の *Time* 誌の記事のような意味で使われるばかりではない。*Quake protection comes at a cost* (耐震設計構造の建築はコストが高くつきすぎる) は実際の金額のことを言ってるし、*Cheap travel insurance comes at a cost* (安価な旅行保険は高くつく) では、結局はあとで痛い目にあう、といった意味であろう。

あらゆる辞書をさがしても、このような成句をあげているものはない。このようなデータの探検は phraseology の重要な仕事と考えている。英語の理解も深まるし、何よりも、辞書改訂の時の材料となる。phraseology 研究の普及を期待している。